

マルクス主義理論史研究の課題 (Ⅸ)

——ウォーラーステイン『アフター・リベラリズム』によせて——⁽¹⁾

太 田 仁 樹

1

1997年の秋に松岡利道氏によって、イマニュエル・ウォーラーステインの著書『アフター・リベラリズム』が翻訳出版された。⁽²⁾ウォーラーステインの仕事は、日本ではすでに広く知られている。主著『近代世界システム』の翻訳は川北稔氏によって次々に公刊されているし、⁽³⁾ 論文集ともいふべき、その他の諸著作の日本語訳も10冊以上になるはずである。私も『反システム運動』を1992年に訳出している。⁽⁴⁾

今回の松岡氏による翻訳も、論文集の一つであり、その初出は1991年から1995年にかけてである。序「「アフター・リベラリズム」とは何か」および第4章「三つのイデオロギーか一つのイデオロギーか：近代性をめぐる似非論争」は書き下ろしのようで、1995年当時の彼の見解であると推定される。この著作によって、われわれは、1990年代中頃までの、近代世界についての彼の了解を知ることができる。彼の論文集はどの本もそうだが、博覧強記に圧倒されるが、同じことの繰り返しが多く、また逆説に富み、相互に関連をつけがたい文言も見出されるので、彼の見解を正確かつ体系的に理解することはなかなか困難である。また、彼の論文集は体系的に理解されることを求めるものでもないようである。

本稿では、思想史・イデオロギー史研究およびマルクス主義研究の観点からみて、彼の議論の中で興味深いものを取りあげて検討してみる。彼の著書の面白さは挑発的であるところにあるので、あえて挑発に乗ってみようということである。

2

ウォーラーステインの「世界システム論」のなかで私が評価しているのは、国民国家を歴史分析の完結した単位とすることを拒否したことにある。このことは、国民国家や国民経済を抜きにした、平板な世界資本主義という世界像をもたらすものではない。

近代世界分析において、国民国家あるいは国民経済を完結した分析単位とするアプローチをとれば、その社会の発展は内発的なものと捉えられ、多様な形態の国民国家や国民経済として出現する諸社会の独自性を分析することは非常に困難になる。国民国家を単位とする資本主義発展の普遍性が前提される場合、分析対象となる社会の独自性は、①その社会の資本主義発展の段階差に起因するものとして処理されるか、発展の多様なヴァリエーションが認識される場合でも、②その独自性は当該社会の資本主義化以前の事物の残存に帰せられるか、③世界資本主義の発展段階の特異性によって当該社会の独自の性格が形成される、という把握になるかである。W・W・ロストウなどのアメリカ近代化論が①であることはいうまでもないが、わが国のマルクス主義的社会科学の歴史においては、労農派理論に①、講座派理論に②、宇野派に③の傾向を見てとることができる。これら三つの傾向は、いずれもレーニンの初期から第一次世界大戦の時期における資本主義認識の方法からアイデアを得たものである。レーニンは、国民経済の内在的発展というロジックでは現実の世界を理解することは困難だと感じながらも、その枠を方法論的に突破することはできなかつたのである。⁽⁵⁾

ウォーラーステインの「世界システム論」は、「再版農奴制」のような一地域における問題も、システムとしての世界資本主義という観点を導入することで、その歴史的意味を解明できることを示した。その点で、パルブスやトロツキーの世界資本主義認識、さらにはローザ・ルクセンブルクの世界資本主義論とは異なったものである。ウォーラーステインの「世界システム論」も、国民国家や国民経済の分析を軽視しているかのごとくうけとられることがあったが、「世界システム論」の強みはむしろ、国民国家や国民経済がそれぞれに個性的なあり様を示すものであることの根拠を解明するのに適したアプローチであるというところにある。

資本主義の発展は、世界の諸地域を同質化するものではなく、中心・半周辺・周辺の三層構造をなす。しかも、各地域がその三層の何処に属するかは固定的なものではなく、コンドラチェフ波動とともに三層構造そのものも変動していく。各地域は資本主義システム参入以前にもっていた社会構造上の特殊性を継承しつつ、ダイナミックに変動する三層構造のなかに引き込まれ、インターステイト・システムのなかに一定の位置をしめる。近代世界における各地域の独自性はこのなかで規定されていく。このような「世界システム論」は、②や③の理論よりも数段すぐれた国民国家分析・国民経済分析を可能にするようにおもわれる。しかし、ウォーラーステイン自身が実際にそのような分析をしているか否かは別である。いまのところ私にはその「可能性」が感じられるにすぎない。

松岡氏の訳になる本書は、世界システムのうち実体経済にかかわるものではなく、いわば上部構造に属するイデオロギーを分析したものである。イデオロギー分析において「世界システム論」の強みが発揮されているのか否かが、この著作の評価のポイントになるであろう。

3

ウォーラーステインによせる私の共感は以上のところまでで、近代世界認識の個々の問題については、「違和感」を感じる部分が多い。この著作を読んで、私が感じる違和感の中心には、ウォーラーステインが地政文化（geoculture）と呼ぶものの捉え方がある。松岡氏も「訳者あとがき」でいっているように、この『アフター・リベラリズム』という本は、まさしく地政文化について語っているものなので、この著作の出現によって、私には彼との違いがより鮮明になりつつあるといってもよい。

拙訳『反システム運動』の「訳者あとがき」で、私はつぎのように、ウォーラーステインのイデオロギー把握について不満を述べている。

「共産主義運動、社会民主主義運動、民族解放運動という近代社会の三大反システム運動が、その成功のゆえに命脈をたったという本書の分析は、とりもなおさず反システム運動の中軸であったマルクス主義の歴史的意味の再吟味を要請するものであろう。訳者があえて翻訳を試みたのも、その問題意識からであった。この点では本書は、やや大ざっぱな理解にとどまっているという印象を与える。わが国の近年のマルクス主義理論史研究の蓄積は、修正主義論争からレーニンまでのマルクス主義理論の展開についてのより深い理解に導いてくれるであろう。訳者の仕事も含めて、読者がそれらの業績に触れられるようお勧めしたい。」⁽⁶⁾

6年前にいただいた「やや大ざっぱな理解にとどまっているという印象」が、この著作によって払拭されるのではなく、「どうも違うなぁ……」という印象（＝「違和感」）へと深まっているのである。

『アフター・リベラリズム』は、リベラリズムと保守主義そして社会主義（＝マルクス主義）という近代世界の三大イデオロギーをとりあつかっており、資本主義世界システムと近代イデオロギーという問題に関する総論的叙述になっているので、ウォーラーステインの考えがより包括的に理解でき

る。⁽⁷⁾したがって、それを知ることにより、「大ざっぱ」という印象から違和感へと印象が深化していったのであろう。

「地政文化としてのリベラリズム」という概念について、記者の松岡氏は、「あとがき」で、つぎのように高い評価を与えている。

「リベラリズム自体の歴史を問うことこそが、リベラリズムを理解する鍵なのである。ウォーラステインは『リベラリズムはゴムのような概念』つまり変幻自在の概念だといっているが、その真意は、リベラリズムを歴史の場に置き、その変遷の中にリベラリズムの本質を探るべきだという考えがあるからである。そのように理解してはじめて、先述した地政文化としてのリベラリズムの意義もよく解明されるのである。」⁽⁸⁾

「リベラリズムはゴムのような概念」というのは、リベラリズムということばを、人びとが様々な意味内容をこめて使っているので、歴史的コンテキストを踏まえなければならないという意味ならばそうであろう。しかしリベラリズムという言葉で、ウォーラステイン自身ががつかまえているものが何なのかが明確でなければ、意味をなさない。ウォーラステインのリベラリズム把握の特徴は、何がリベラリズムなのか、その思想内容はどうなのか、という議論がどこにもないことである。

彼のリベラリズム概念は、保守主義と社会主義という概念とセットになっている。保守主義、リベラリズム、社会主義という言葉が、彼が用いる仕方は単純である。右翼・中道(中間)・左翼という政治勢力の三分割とイデオロギーの三分割とが対応しているのである。近代世界における政治的対抗は、保守主義、リベラリズム、社会主義によって表現され、しかも近代世界に対し大きな距離を置いて鳥瞰するならば、この三者は対抗ではなく、相互に補完関係にある。これがウォーラステインのいうリベラリズムの一元支配という見方の意味である。この際に、ウォーラステインはこれらの思想の内容を確定することにせず、政治勢力としての三勢力をイメージし

て、そのイデオロギーを、保守主義、リベラリズム、社会主義と呼んでいるのにすぎない。すなわち、右翼勢力・中道勢力・左翼勢力という、一定の政治的配置に対応するイデオロギーとしてしか、それぞれの思想は捉えられていないのである。機能としてのイデオロギーの把握があるのみで、その内容の分析がない。これは通例の思想史的アプローチから見ると決定的な欠落である。

イデオロギーや思想の分析においては、その思想の中心命題はなにであり、それを補完するサブ命題群は中心命題とどのような関連にあり、サブ命題相互はどのような論理的な関連をもっているのか、このような思想内容の構造の解明こそが第一の課題である。リベラリズムを取り上げるなら、リベラリズムと呼ばれる諸思想からその特質を帰納的に再構成し、他の諸思想との比較において、その思想を類型化して把握する。このようにしてリベラリズムの思想的内容が解明され、つぎの段階で、そのイデオロギーの歴史的・現実的機能についても語る事ができるのである。私は思想史、イデオロギー史の研究はこのようなものであるべきだと考える。しかし、イデオロギーをその思想的内容の分析によって把握するのではなく、政治的機能のみで捉えるというやり方を、ウォーラステインは意識的に用いていると思われる。そして松岡氏は、それを彼のアプローチの長所だといっている。

私にいわせると、イデオロギーの思想的内容と論理構造を分析しないイデオロギー分析は、その歴史的機能も分析できない。ウォーラステインはこの思想史、イデオロギー史分析にとって不可欠な課題を意識的にパスしているので、リベラリズムそのものの意味内容の変化が捉えられていないし、保守主義や社会主義との内容上の差異も捉えられていない。近代世界の特有の地政文化が出現してくるのは、フランス革命以後であるという見方は妥当であるが、リベラリズムがフランス革命以前の啓蒙思想のなかに思想的淵源をもつこと、その中心には個人の人格的権利の思想があることが見逃されている。

リベラリズムと呼ばれる思想は、その内容を歴史的に変化させている。今世紀初頭に登場する「新リベラリズム」は、「結果としての平等」が資本主義の現実のなかでは重要な意味をもつと考える思想であり、本来の意味のリベラリズムからは、大きな内容変換をおこなっている。この新リベラリズムは、アメリカでは、1930年代から1960年代にいたる、民主党のニューディール連合の指導理念であり、共和党のニクソンの「今日ではだれもがケインジアン」であるという言葉は、彼さえも「結果としての平等」を無視できなかったことを表している。ウォーラステインは、リベラリズムの綱領のなかに「普通選挙権」と「福祉国家」を入れ込んでいるが、福祉国家は古典的リベラリズムのなかからは出てこなかったことを見落とすべきではない。そうでなければ、1980年代を席卷した「新・新リベラリズム」が市場万能論を内容として登場し、「おまえはリベラルだ」というけなし言葉で新リベラリズムを排撃することになる歴史的経緯は理解できないのである。ついでに言えばこの新・新リベラリズムは「新保守主義」という別名をもっているが、彼らの思想内容はヨーロッパで19世紀に活動していた「保守主義」とはまったく別の内容を意味している。本来の「保守主義」は市場万能論の対極に位置するものであろう。家族の復権、信仰心の重視など共通面はあるがそれは副次的なものにすぎない。

ウォーラステインのいう「地政文化としてのリベラリズム」論は、古典的リベラリズム、新リベラリズム、新・新リベラリズムの思想内容を吟味せず、ひとしなみにリベラリズムというタームで括っているために、彼の意図とは逆に、19世紀、1970年頃まで、1970年代以降、という三つの時代の特徴をとらえそこなっている。

リベラリズムは個人の自由を基礎におく思想であるが、経済的側面から見れば「営業の自由」を意味する。したがって、資本の自由な運動を根本原理とする近代資本主義システムにふさわしい思想であった。しかし、市場経済あるいは資本主義の自由な展開は人間相互の社会的絆の分断であり、社会の

存立は危機にさらされる。そこで提起されるのが、伝統的価値への回帰をめざす保守主義や、人間同志の社会的絆を理性によって再構築しようとする社会主義であった。

ウォーラーステインはこれらの三つのイデオロギーについて、反国家的ポーズをとりながら国家重視であったと指摘し、これをパラドックスのようにならすが、三つのイデオロギーは、それ自身反国家であったことはなく、それぞれの理想を実現するために国家を道具とみなしていた。保守主義は、市場というシステムによって、個人主義に解体されていく社会をつなぎ止める役割を国家に期待した。リベラリズムは、アダム・スミスの『国富論』が示すように、国民として結集した人びとの福利向上をめざす思想であり、国家の存在は前提されたものであった。マルクス主義は、国家死滅というアナキスティックなスローガンを掲げていたが、近未来に国家が死滅することなど考えたマルクス主義者は一人もいない。リベラリズムは封建国家の廃絶を、マルクス主義は封建国家あるいはブルジョア国家の廃絶を目指したが、自分たちの国家樹立によってそれにかえようとしたのである。彼らが「反国家」そのものを目指したことはない。パラドックスはウォーラーステインのレトリックのなかにしかない。

リベラリズムはそれ自身矛盾を内包しているが、その矛盾は近代社会そのものの矛盾である。その意味でリベラリズムは近代社会を代表するイデオロギーであるといつてよい。しかし、矛盾の内包ということは、思想やシステムとしての弱さを示すものではない。むしろそれは強靱さを示しているのである。その矛盾とは、個人の人格的な権利を追求していけば、資本主義社会の現実に対して変革を求めざるをえないところにある。資本主義社会は、様々なレベルでヒエラルキー的なシステムであり、下位の者にとっては抑圧的なシステムである。市場において、自由な諸個人が自由に競争すれば、そこに現出する世界は、力のない者（システムの下位の者）にとっては、自由のない世界にほかならない。システムの上位の者の自由を制限しなくては、

下位の者はわずかな自由さえ享受することはできない。平等原理によって補完されなければ、自由の実現は絵空事である。自由と平等との間に矛盾がと言われることが多いが、資本主義社会では、自由そのものが矛盾を内包し、平等そのものが矛盾を内包している。社会主義は、そのような「欺瞞的」なシステムを批判し、真の自由、真の平等をめざす運動であったともいえよう。その運動もまた、現実態としてあらわれたものは、よりいっそう欺瞞的なシステムであったのだが。

リベラリズムの理想は、このように現実態となるとただちに欺瞞的となり、それを克服する運動はより欺瞞的になる。これはウォーラーステインのいえば、矛盾かもしれないが、近代社会の強靱さはここにある。現実態としてのシステムに対する反抗そのものが、理念としての「自由と平等」を決してこえることができないのである。ウォーラーステインが旧左翼崩壊後あらわれたと述べている「新しい社会運動」、すなわちフェミニズム運動、マイノリティ運動、エコロジー運動などのいわゆる「シングル・イシュー・ムーブメント」は、リベラリズムが約束したものが、一部の人間にしか保障されなかったことにたいする抗議であり、保障から漏れた者に対する再保障の要求であり、思想的に近代をこえるものではない。リベラリズムに内包されていた理想が繰り返されているにすぎないのである。

マルクス主義は、イデオロギーとしてはリベラリズムとは異質である。なによりもそれは、普遍的解放(=「千年王国」)が人類史において可能であると考えたユートピア思想であり、それが特権的な主体によってなすとげられる(=「選民による革命」という、特権的主体による普遍的解放論である。現実政治においてこの二つの側面が薄められることはあっても、マルクス主義運動やマルクス主義体制を正当化するにはこの論理は不可欠であった。それは近代社会の矛盾が最終的に消滅する事態を想定する点で、リベラリズムの目指す世界とは本質的に異質である。

フェミニズムにしても、マイノリティ運動にしても、エコロジー運動にし

ても、リベラリズムの枠内での反システム運動は、近代資本主義システムによって、換骨奪胎され、飲み込まれていく。マルクス主義運動も現実政治において有効な政策を提起するときは、実際には「自由と平等」の適用範囲の拡大と実質化という内容の政策になっている。この意味でマルクス主義もリベラル化したというウォーラステイン言い方は妥当する場合もあるが、しかし、マルクス主義の核心については妥当しないのである。

マルクス主義とリベラリズムとは本質的に収斂しない。マルクス主義の支配する体制では、リベラルな価値は「ブルジョア的」という修飾語をつけて、公然とおとしめられる。リベラル勢力の支配する体制では、実質的には、ヒエラルキーの下部の人びとはそこから排除されているが、公式にはリベラルな価値は称揚される。マルクス主義支配とリベラル勢力の支配は異質である。この点を見落とす点にウォーラステインの重大な欠陥がある。ウォーラステインは、パクス・ルソ・アメリカナ体制を本質的にパクス・アメリカナととらえ、ソ連の存在を補完的なものとしか見ない。ソ連がアメリカの支配を補完していたというのはそのとおりであるが、ソ連の体制がリベラリズム支配であったというような見方は、ソ連圏で生活していた人びとの現実感覚とは、ずれるものであろう。

4

フランス革命の「自由」とか「平等」とかいうスローガンは市場経済の表層から絶えず生ずるもので、資本主義社会の日常生活に根ざすものである。しかしそのシステムに満足している人はそれほど多くない。「自由といっても金持ちの自由じゃないか」とか「平等といってもタテマエだけじゃないか」と下層の人びとはいう。19世紀ヨーロッパ社会では、このような感情が容易に社会主義と結びついた。ここでいう社会主義とは、商品交換と私的所有そのものを否定するような共同体的社会への志向を意味している。ここで

はリベラリズムと社会主義は対立している。ロシア革命の衝撃は、古典的リベラリズムの是正を余儀なくさせ、中心部資本主義に福祉社会を生み出した。新リベラリズムの支配である。新リベラリズムにたいしては、上層側から「機会の平等を認めるべきで、結果の平等などというのは怠け者の言いぐさだ」という不満がでてくる。こうして新・新リベラリズムが登場する。新・新リベラリズムは新保守主義といわれるが、市場万能論を思想的中核としている限り、家族の価値などを強調しようとも、19世紀の保守主義とはまったく異質である。

イデオロギーとしてのリベラリズムの歴史を振り返ると、新リベラリズムは、平等主義への偏向をつよくもつ「逸脱」であり、古典的リベラリズムと新・新リベラリズムとが、経済活動の自由を重視するという意味では、リベラリズムの本流であることがわかる。ただし、社会的機能は異なる。新・新リベラリズムには、「市場ゲームにおける強者の傲慢」という以上の内容は感じられない（ハイエク『自由の条件』など）。リベラリズムは市場経済・資本主義社会の本来のイデオロギーであるといえるが、市場経済・資本主義経済は社会的分極化を必然化し、リベラリズムの個人主義は社会的絆を分断していく傾向がある。そこでリベラルな支配層は伝統的価値や社会主義の要求を部分的にとりいれていくことになる。ウォーラーステインはこれを保守主義や社会主義のリベラル化と呼んでいるが、問題は保守主義や社会主義の変質ではない。リベラリズムそのものが、社会的統合力の弱いイデオロギーであるということが問題なのである。

リベラリズムは、個々人の人権を掲げる思想でもあるが、この権利のカタログは際限なく増やすことが可能である。一方、資本主義社会の現実はこの権利が実際に保障される社会層をせまくする傾向があるのである。人権思想としてのリベラリズムはその徹底を目指すならば、資本主義システムに対する反システム運動となりうるのである。ウォーラーステインのいう「新しい左翼」は、「新しい社会運動」と呼ばれるもので、フェミニズム、マイノリ

ティ運動，エコロジー運動などであるが，フェミニズムに典型的にみられるように，その主張は旧来のリベラリズム支配体制が，自分たちを排除していたことを告発し，リベラリズム原理を自分たちにおいても実質化するよう要求するものに他ならない。そこにはマルクス主義に見られた千年王国論的普遍的解放論はない。

フランシス・フクヤマを批判して，「旧左翼解体後の世界は，「歴史の終焉」ではなく，リベラリズムの終焉である」といってみても，現実を説明することはできない。もはや，現実的な反システム運動の目指すものはリベラルな価値の枠を超えるものではない。非リベラルな反システム・イデオロギーは，その担い手を見出しえなくなっているのである。古典的保守主義は今世紀初頭にすでに世界の地政文化にその位置をしめていない。1968年から1991年の過程は，特権的主体による普遍的解放というイデオロギー（マルクス主義）が機能する場の喪失であった（1975年の「ベトナム解放」と「ベトナム・カンボジア戦争」がそのメルクマールであろう）。現在，リベラリズムの枠外からオールタナティブな世界を構想できるのはイスラム主義などの宗教思想くらいであろう。しかしこのことは「歴史の終焉」を意味するものではない。資本主義システムとリベラリズムの支配は，ようやく本来の姿をあらわし始めたというべきであろう（「資本主義の歴史のはじまり」）。この社会は，ヒエラルキー的で，下層の者には抑圧的な社会であるが，下層者の反抗はリベラリズムの実質化という要求によっておこなわれる。人間の普遍的解放とか解放闘争における特権的な主体とかを構想しない反抗は，そのような形でしかおこなわれないのである。

「自由と平等」というフランス革命のスローガンを掲げる反抗運動を自らのうちに抱えつつ，その運動をつねに懐柔し飲み込みつつヒエラルキー的で抑圧的な構造を維持し続けるシステム，それが近代世界システムではないだろうか。とすれば，1789年から1991年はそのようなシステムが本来の姿を見せる過渡期でしかない。アフター・リベラリズムではなく，リベラリズムの

支配はようやく開始されたといわねばならない。人類そのものの死滅という事態を別にすれば、すくなくとも21世紀中にこのようなシステムが終了する気配はない。反システム運動は、システムに巻き込まれることを承知の上で、人権の実質化を掲げて進むほかに道はない。むしろ、ウォーラーステインの次の発言は、彼自身がこのことを自覚していることを示しているのではないだろうか。

「わたしたちは想像上の原子的個人ではなく、無数の集団に基礎をおく、新しい普遍主義の構築方法を探求する必要がある。しかしそれにはわたしたちが受け入れるのを渋っている、一種のグローバル・ソーシャル・リベラリズム a kind of global social liberalism that we are reluctant to accept が必要である。」⁽⁹⁾

グローバル・ソーシャル・リベラリズムの内容が問われるであろう。しかしグローバルだろうが、ソーシャルだろうが、ウォーラーステインもリベラリズムからぬけられないのだ。だとすれば、松岡氏のように、「アフター・リベラリズム」という看板を簡単に真に受けることはできないであろう。

5

ウォーラーステインのマルクス主義論を検討するまえに、彼の民主主義論をリベラリズム論との比較で見よう。ウォーラーステインは「より公正」と「より民主主義的」という言葉が好きである。

「われわれが関心をもつのは、歴史具体的なシステムとしての社会主義だけである。このような意味での社会主義は、少なくとも次のような特徴をもった史的システムでなければならないだろう。すなわち平等や公正の度合いを最大限に高め、また人間自身による人間生活の管理能力を高め（すなわち民主主義をすすめ）、創造力を解放するような史的システムでなければならないであろう。」⁽¹⁰⁾

このような民主主義に対する態度とリベラリズムに対する態度はまったく異質である。ウォーラーステインにとっては、民主主義とは歴史的に存在する一つの統治様式ではなく、好ましい将来社会につける形容詞にほかならない。他方、リベラリズムについては、地政文化的な支配様式としてのみ処理されていた。すなわち過去における Sein としてのみリベラリズムを捉えているのにたいし、民主主義は人類が完成すべき Sollen として取り扱われている。このような民主主義把握は、人類史上における民主主義の意義を捉えたものとは言えない。現実の民主主義が、多数者による少数者の抑圧という機能を果たしたり、ファシズムを招来したこともあったことは、問題にされていない。歴史上の一つの制度として民主主義が実存していることを考えると、このような取り扱い方は疑問である。

マルクス主義とマルクスの扱い方にもこれに似た疑問が生ずる。ウォーラーステインのマルクス主義の処理は、マルクス主義とマルクスの切り離しである。彼は、歴史的に実在していたマルクス主義運動やマルクス主義体制を、レーニン主義と呼ぶことで、マルクスその人とは切り離している（エンゲルスやカウツキーについては言及することがあまりない）。この著作では、特に第12章「共産主義崩壊後のマルクス主義」で、マルクスとマルクス主義について論じている。支配的マルクス主義（マルクス・レーニン主義）は次の五つの命題に基礎を置いていたと言う。⁽¹¹⁾

- ① 人類の究極の目標である共産主義社会を達成するために、必要な第一歩は国家権力をできるだけ早くとることであった。これは革命をおこなうことでのみ可能であった。
- ② 国家権力を保持するためには、いわゆる進歩的勢力と／あるいは労働者階級が組織された普遍的な党を作ることが不可欠であった。
- ③ 資本主義から共産主義に移行するためには、プロレタリア独裁と呼ばれる一段階を、つまり権力をもっぱらそしてそっくり労働者階級に引き渡す段階を通ることが必要である。

④ 社会主義国家は共産主義的ユートピアに至る普遍的で正しい進歩の道筋における必然的な段階であった。

⑤ 社会主義（権力にある党）の段階から共産主義の段階への移行のためには、「社会主義建設」が、つまり国民的発展の追求が不可欠である。

ウォーラステインによれば、これらのマルクス・レーニン主義（really-existing Marxism）の五命題は、次々に懐疑的に考察されるようになったのである。彼自身もこの五命題が妥当しないと考えているようである。一方、マルクス・レーニン主義と区別されたマルクスの思想のうち、近代世界システムの分析にとって、なお有益で不可欠でさえあると思える四つのキー・アイデアというものを列挙している。⁽¹²⁾

① 階級闘争：階級闘争は不可避的、根本的であるという命題は、他の形態の闘争によっては少しも論駁されることはないのである。なぜならば、後者は前者の仮面をかぶった形であると論じることはいつでも可能だからである。実際マルクスの命題は大いに強化されているので、多くの階級闘争が「諸民族 peoples」の間の闘争というレッテルでおこなわれるという主張は、説得的なのである。

② 両極化：分析の単位として資本主義世界経済を取り上げれば、二つのことがわかる。第一に、窮乏化は世界経済の水準では不変である。……第二に、工業化諸国の労働者階級の実質的収入の上昇に関する観察は、あまりにも狭い観点によってゆがめられている。

③ イデオロギー：イデオロギー（マルクス主義を含む）の分析の重要さか、あるいはこの分析に対するマルクス主義の貢献の重要さかの、どちらか一つを過小評価すべきなんの理由もない。

④ 疎外：ある分析者たちは、この概念を「若きマルクス」だけのせいにし、それゆえこれを放棄することになる。これは残念なことだといえよう。というのは、それはわたしにはマルクスの思想の本質的な概念に思えるからである。……疎外と戦うことは、人々 people をしてその尊厳を

回復せしめるため戦うことである。

ウォーラーステインがマルクスから受け継ぐものだと考えるのは、上記の四点である。

先にウォーラーステインにおけるリベラリズムという概念と民主主義という概念を比較したところでも見たように、彼はリベラリズムは分析の対象 (Sein) として取り扱っているが、民主主義については継承する (発展させる) べき理念 (Sollen) として取り扱っている。ここでのマルクス・レーニン主義とマルクスの思想との取り扱いも、同様の区別がなされている。マルクス・レーニン主義の五命題は過去に展開された歴史的存在 (Sein) としてのマルクス主義運動あるいはマルクス主義体制のなかから抽出された諸命題であり、ウォーラーステインは現在ではそれは妥当しないと考えている。マルクスの思想の四命題は継承 (発展) させるべき理念 (Sollen) として取り扱われている。取り扱いがまったく異なっているのである。したがってマルクスの思想とマルクス主義との関連 (継承, 発展, 批判, 歪曲, etc.) については問われることがないのである。こういう恣意的な取り扱いは、しばしば思想史の研究者が陥りがちな陥穽である。このシリーズで何度も指摘されてきた、「活学活用主義」的な態度ゆえの陥穽といえよう。このように歴史的に存在した諸思想のなかから自分の気に入った要素と、自分が賛成できない要素とを区分して、並べ立てるという行為は、ナマの自分の思想の表出にすぎず、自己満足としては意味があるかもしれないが、その思想の内容と機能を解明し、さらにその時代の意味を解明するという学問的営為とはほど遠いものである。

ウォーラーステインは、すでに学者ではなく思想家なのだからそれでもいいのだ、という言い方もできるかもしれない。しかし、マルクス主義のなかから四命題だけを継承した「思想」というものも貧弱なものではなかるうか。マルクス主義についてのそのような処理の仕方が、マルクスを含めたマルクス主義の思想内容の理解を妨げるものになっているし、マルクス主義の

社会的機能の分析を通じての近代世界の理解についても障碍になっているのである。

たとえば、ウォーラステインは「プロレタリア独裁」概念の妥当性を否定していると思われる。(歴史的過去においては妥当性をもつ局面があったことを否定しているのか否かは不分明だが、現時点における妥当性を否定しているのは明白である。)他方で、階級闘争概念の有効性を主張している。しかし、『フランスの内乱』をはじめとするマルクスの諸テキストにおいては、階級闘争概念とプロレタリア独裁概念は密接に関連している。プロレタリア独裁を導かないような階級闘争概念は、マルクスのものではなく、すでにウォーラステイン的なものにその意味内容を変容させられているはずである。ウォーラステインは、プロレタリア独裁と無縁の、自分なりの階級闘争概念を展開するべきではなかっただろうか。両極化、イデオロギー、疎外についてもウォーラステインは、マルクスによって語るのではなく、自分の概念の意味内容を展開し、マルクスのそれとの差異を明確化すべきであろう。ウォーラステインのマルクスにたいする態度は、マルクス・レーニン主義からマルクスを救いようとする意図に起因する「逃げ腰」が感じられる。マルクスとマルクス主義の思想内容を検討すれば、後者は前者の思想の核心を継承し、現実適用性を増加させたものであることがわかる。⁽¹³⁾ウォーラステインは思想内容の検討を避けているから、両者が異質な思想であるかのような議論をなしうるのである。

また、マルクスとマルクス主義の思想内容の検討の回避は、その社会的機能(これを地政文化といってもよいであろう)の分析を深みのないものに行っている。世界システムにおける地政文化的な状況は地域により時代により種々様々である。類似の志向性をもつイデオロギーがある状況では支配の強化となり、ある状況では支配に対する抵抗となる。1848年以降を全体としてリベラリズムの支配する時代であるということは超鳥瞰的な見方としては妥当だとしても、個々の時期、個々の地域には妥当しない。

マルクス主義とリベラリズムは19世紀末以来の百年間の地政文化において重要な役割を演じており、しかもその役割は地域により時期により種々様々である。たとえば、ドイツ社会政策学会やオーストリア学派経済学とドイツ語圏マルクス主義との思想的交錯、ロシアのリベラリズムの合法マルクス主義としての登場（ストルーヴェなど）、戦前日本におけるリベラリズムとマルクス主義との協力と反発（高橋亀吉など）やマルクス研究の隠れ蓑としてのスミス研究（大河内一男など）。これらの事実、マルクス主義がリベラリズムに吸収されたというような言い方で処理できるものではない。

自由な労働力商品の存在しない社会、専制的で独裁的な政治支配の行われている社会が、資本主義以前や近代以前の社会ではなく、近代世界システムのなかにその位置を占めているからこそ存立しうることを、ウォーラステインの世界システム論は明らかにした。近代世界システムにおける、労働も、政治も、多様な形態で出現することを解明した世界システム論の主張者が、地政文化については、平板なイデオロギー論に終始したということは、世界システム論が貫けなかったことを意味している。世界システム論は、のっぺらぼうの超鳥瞰図を提示するものでなく、特定の時期の特定の社会の特徴を説明できる枠組みでなければならない。ウォーラステインの地政文化分析は、思想史研究の第一段階である各イデオロギーの内容分析を欠落させたうえで、その社会的機能を解こうとしたために、この課題に答えることができなかったといえよう。

註

- (1) 本稿は、1998年3月31日、小樽で開催された「ポスト・マルクス研究会」でおこなった報告に、手を加えたものである。松岡利道氏をはじめ、有益なコメントを下された参加者の皆さんに感謝します。
- (2) 『アフター・リベラリズム：近代世界システムを支えたイデオロギーの終焉』（藤原

- 書店, 1997年)。原著は, *After Liberalism*, New Press, 1995.
- (3) 『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立——』Ⅰ, Ⅱ, (岩波書店, 1981年), 原著, *The Modern World-System: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy*, Academic Press, 1974. 『近代世界システム 1600-1750——重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集——』(名古屋大学出版会, 1993年), 原著, *The Modern World-System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750*, Academic Press, 1980. 『近代世界システム 1730-1840's——大西洋革命の時代——』(名古屋大学出版会, 1997年), 原著, *The Modern World-System III: The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-Economy, 1730-1840s*, Academic Press, 1989.
- (4) 『反システム運動』(大村書店, 1992年)。原著は, *Antisystemic Movements*, Verso, 1989.
- (5) この点についての私の見解については, 拙著『レーニンの経済学』(御茶の水書房, 1989年)の第2部「帝国主義論と資本主義発展段階論」を参照。
- (6) 『反システム運動』, 164頁。
- (7) 『反システム運動』における, マルクス主義, ナショナルリズム, 社会民主主義という三大反システム・イデオロギーとの関係については, 明確に語っているわけではないが, 旧左翼といういかたで社会主義のなかに共産主義運動, 社会民主主義運動, 民族解放運動の三つが含まれているようにも思われる。だが, それでは, 民族解放運動は社会主義なのか, ウォーラーステインはイエスともノーともいっているように思われるが, 分明ではない。
- (8) 『アフター・リベラリズム』, 423頁。
- (9) 『アフター・リベラリズム』, 325頁, 原著, p. 215.
- (10) 『新版 史的システムとしての資本主義』(川北稔訳, 岩波書店, 1997年), 153-54頁。原著, *Historical Capitalism with Capitalist Civilization*, Verso, 1995, p. 110.
- (11) 『アフター・リベラリズム』, 329-336頁, 原著, pp. 220-225.
- (12) 『アフター・リベラリズム』, 341-345頁, 原著, pp. 228-231.
- (13) この点についての私の見解については, とりあえず平井俊彦編『社会史思想史を学ぶ人のために』(世界思想社, 1994年)所収の拙稿「マルクス主義の展開とその歴史的意义」を参照。